

【研究論文】

スウェーデンにおける障害者の学び直しと

生涯学習・発達の保障

—「ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学（Västanviks folkhögskola）」の訪問調査から—

石川衣紀（長崎大学教育学部）・田部絢子（金沢大学人間社会研究域学校教育系）・内藤千尋（山梨大学教育学部）・池田敦子（東海学院大学人間関係学部）・石井智也（東海学院大学人間関係学部）・柴田真緒（埼玉県立所沢特別支援学校）・能田昂（尚絅学院大学心理・教育学群）・田中裕己（横浜いずみ学園）・高橋智（日本大学文理学部）

1. はじめに

文部科学省では「障害者が生涯にわたり自らの可能性を追求できる環境を整え、地域の一員として豊かな人生を送ることができるようにすることが重要であるとの認識」のもと、2017年度に「障害者学習支援推進室」を新設して「障害者の生涯を通じた多様な学習活動を支援するため、学校卒業後における学びの支援、福祉・保健・医療・労働等の関係部局と連携した進学・就職を含む切れ目ない支援体制の整備、障害者スポーツや障害者の文化芸術活動の振興等に関する取組を横断的かつ総合的に推進」することを開始した（文部科学省：2018）。

上記のような日本の状況に比して、スウェーデン・デンマーク等の北欧福祉国家においては「国民大学ないし民衆大学（Folkhögskola）」（以下、国民大学）に象徴的な成人教育・生涯学習機関が、コミューンのほか赤十字・救世軍・NGO・財団などの非営利団体によって数多く設置されている（高橋ほか：2019）。

スウェーデンにおいて国民大学は、1868年に初めて設立されてから150年以上の歴史を有するが、現在は153校を数える。18歳以上の全ての人を対象とし、高校卒業資格を取得できる「一般コース」（必置）のほか、移民のためのスウェーデン語習得コース、職業コース、成人障害者コースなどのバリエーション豊かな「特別コース」をもつ。

多様なバックグラウンドをもつ人々の学びの場としての意味はきわめて大きく、移民や様々な理由で義務教育・高校教育を受けられなかった人、アルコール・薬物依存のため長く服役していた人なども多く通う。また「もう一度学びたい」「より深く学び直したい」という人のための「学び直しの間」「生涯学習・生涯発達の保障」としての役割も有している（高橋ほか：2018a）。

高橋智（日本大学教授・東京学芸大学名誉教授・放送大学客員教授）を代表とする「北欧福祉国家と子ども・若者の特別ケア」研究チームは、1994年から四半世紀以上にわたり、北欧福祉国家（スウェーデン、デンマーク、フィンランド、ノルウェー、アイスランド）の取り組みを事例に、多様な発達困難を有する子ども・若者の発達支援・特別ケアのあり方についての訪問調査（全23回）と日本との比較研究を行ってきた。

その一環として、2019年3月、スウェーデンのダーラナ県レクサンドコミューンにある「ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学（Västanviks folkhögskola）」を調査訪問し、校長や学生へのインタビューを行った。当国民大学への訪問調査は2008年3月、2009年3月に次いで3度目となる。

ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学は成人聴覚障害者に高校段階の教育内容を提供している他、手話通訳者養成・手話教師養成、聴覚障害を有する移民の受け入れ支援に関する拠点校的役割を果たしている。

上記に示した問題意識のもとに本稿では、これまでに3回の訪問調査を実施したヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学の事例を通して、スウェーデンにおける障害者の学び直しと生涯学習・生涯発達保障のあり方について検討する。なお、ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学の調査協力者に対して、事前に文書にて「調査目的、調査結果の利用・発表方法、秘密保持と目的外使用禁止」について説明し、承認を得ている。

2. ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学の概要

ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学は、1969年にスウェーデンろう協会によってダーラナ県内の基礎自治体であるレクサンドに設立された（写真1～写真3）。同じく国民大学である「Fornby 国民大学」の聴覚障害者向けコースとして発足したのが始まりであり、1978年に国民大学として独立して現在に至っている。発足初年度は14名の男子学生が入学し、親が聴覚障害を有している学生のための手話通訳コースも同時に開講された。



写真1 ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学の外観（ウェブサイトより）



写真2 ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学の俯瞰写真（ウェブサイトより）



写真3 ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学キャンパスマップ（ウェブサイトより）

現在の学生数は約 100 名であり、授業は基本的に手話のみが使われている。手話を用いるために少人数クラス（5～6 人）が基本となる（写真4）。修了後の進路は、ろう学校教師、アシスタント、手話通訳者、進学が大半を占める。教職員スタッフは 52 名であり、このうち約半数が聴覚障害当事者である。寄宿舍（80 部屋 130 床）も完備しており、ほとんどの学生がこの寄宿舍を利用している。



写真4 授業風景（ウェブサイトより）

調査訪問時の学長グニラ氏（写真5）は、ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学に学生として入学し、教員資格を得て国内の特別学校で勤務したのち、同校に教員として赴任した。同校で33年間教鞭をとっており、学長職としては16年間務めている。発達障害を主な専門としながら、前任校でも手話を使って授業をしていたという。



写真5 学長のグニラ氏

講義や学生・教師間のコミュニケーションも全て手話で行われており、手話が第一言語であるという点を重視しているとともに、「ろう者のための教師である」という認識を教師集団において高めることにもつなげている。また手話は聴覚障害者だけのためのものではなく、言語障害・ダウン症などの聴覚障害以外の障害を有する人とのコミュニケーション手段としても重視されている。

それゆえに手話の使用を中心とした環境整備も重視され、スウェーデンの学校では通常ホワイトボードが一般的であるが、ヴェスタンヴィーク聴覚障害では黒板が採用されているほか、教師も黒色の服装をなるべく着用して、手話が見やすくなるように工夫している。教室内の机の配置も教師を中心に半円状にすることで、互いの手話を見やすくしている（写真6）。



写真6 手話を見やすくするための座席配置

教室の窓は高い位置に設けられ、外光によって手話が見えづらくなならないような配慮もされている。校内環境には鮮やかな色が積極的に使われ、広場や食堂などに鮮やかな色を用いることで学生の記憶の明確化を図っているほか（写真7）、視覚活用を強化することで手話によるコミュニケーションをより高めていく意図がある。

校内にはスタジオルームが設置されており、毎週月曜日に校内放送を行い、学生が出演する（写真8）。以前はここでスウェーデン全国の聴覚障害者向けテレビ放送等も行われていた。現在その役割は別の自治体へ移っているが、ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学がスウェーデン全体の聴覚障害者に対しても重要な役割を果たしていたことがうかがえる。



写真7 青を基調にした憩いの場



写真8 校内のスタジオルーム

3. 多彩なコースプログラム

①一般コース

1～3年間のプログラムであり、聴覚障害者または手話を日常的に利用している人が対象である。全ての授業が手話で行われる。学習内容は基礎学校～高校中級

のレベルで、主な科目内容はスウェーデン語、スウェーデン語手話、社会科、数学、ウェルネスが含まれる。

「聴覚障害科」が近年新たに開設され、ろう者の歴史を学び、ろう者としてのアイデンティティの確立をめざす重要な科目として位置づけられている。

②手話通訳者養成コース

4年間のプログラムであり、手話通訳者の知識とスキルを身に付けることを目的とした職業教育が提供される。前半2年間は手話言語、後半2年間は手話スキルについて学ぶ。移民の聴覚障害者とコミュニケーションをとる機会も設定される。手話通訳者という仕事を社会へ発信していくことも、このコースの重要な意義とされている。

手話通訳者養成コースの学生へのインタビューにおいて「友人が以前このコースで学んでおり、興味があった。言語そのものにも強い関心があるため、ここで深く学んでいる」「発達障害児支援をしており、彼らへの支援にも役立つと考えている」といった声が挙がり、多様な問題関心のもとに学んでいる学生が多いことがわかる。

③手話教師養成コース

1年間のプログラムであり、手話を教育できる専門性を有する教師を養成している。ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学を代表するプログラムである。対象は「言語や人との出会い・相互のコミュニケーションに興味があり、主に成人に手話を教えることを望む人」とされている。

手話教師として様々なターゲットグループに手話を教えることができるように、手話以外にも多様な専門科目について学んでいくことが重視される。とりわけ語学学習、教材開発、グループダイナミクス、リーダーシップについての知識・専門性の習得に取り組んでいる。

④健康プロファイル総合コース／アウトドアコース

1～3年間のプログラムであり、聴覚障害者・盲ろう者が対象となる。全ての授業は手話で行われる。マッサージ、身体の解剖学・生理学、食品と栄養、ストレス管理と公衆衛生等についての基本的知識等を学ぶ。野外生活についても学び、秋にはマウンテンハイキング、冬にはスキーを実施する。

⑤手話学習コース

1～2年間のプログラムであり、手話をもう一度丁寧に学びたいという聴覚障害者が対象となる。全ての授業は手話で行われる。このコースには、スウェーデン語、スウェーデン語手話、社会科、聴覚障害科、ウェルネスが含まれる。基礎学校での学習内容を手話で丁寧に学び直すニーズにも応えている。

スウェーデンにおいては全ての聴覚障害児に手話習得の権利を保障しているだけでなく、聴覚障害児の親にも無償で手話を学ぶ権利を保障している。それゆえに、聴覚障害児の親を対象とした手話習得短期プログラムも開講している。

⑥聴覚障害者の通訳トレーニングコース

1年間の遠隔授業（8回のスクーリングを含む）によって行われる。通訳経験者を対象に、手話通訳技術、外国人への通訳技術、移民への通訳技術などを習得することを目的とする。とくに通訳、倫理、コミュニケーションについての知識を深め、様々なコミュニケーション方法を用いて通訳プロセスを発展させることに重点が置かれている。

⑦移民のためのスウェーデン手話コース

1～3年プログラムであり、移民の聴覚障害者が対象である（写真9）。全ての授業は手話で行われ、スウェーデン手話、社会、数学、ヘルスケア、聴覚障害研究、職業訓練などの科目が用意される。このコースの入学要件として、スウェーデンの社会保障番号を所有していることが求められる。



写真9 移民のためのスウェーデン手話コースの様子

⑧運転免許取得支援コース

レクサンドコミュニティの自動車学校と連携して、手話と運転科目の理論を含む15週間の集中コースを提供している。運転教習費用は15,000 SEK（1SEK=約12円）であるが、失業していて特定の条件を満たしている場合は、CSN（スウェーデン学生支援委員会）の学資ローンを利用して運転免許証の取得ができる。

4. ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学の意義・役割と課題

①手話教師養成の課題と人工内耳装用児の増加

ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学の手話教師養成課程は1991年に開設され、2003年に一度停止したが2019年から再開している。現在は9名が学んでお

り、学校教師を休職して通っている人もいる。

スウェーデン全体では訓練を受けた手話教師の数が圧倒的に不足しているが、その背景にはスウェーデン国内で手話教師養成を行っているのが同校 1 校のみとなっているほか、そもそも聴覚障害児の親が子どもに人工内耳装着を求める傾向にあり、手話そのものが軽視されることとも関連している。

スウェーデンは 1981 年に世界で初めて法的に手話を言語として位置づけ、1983 年より手話を第一言語とするバイリンガルろう教育のカリキュラムを採用した。しかし 2007 年以降、スウェーデンのほとんどの産科で新生児聴覚スクリーニングが行われるようになり、幼児期からの人工内耳装着が増加している現状がある。日本と比較した場合、聴覚障害の軽い者にも人工内耳を装着させていると推測されている（伴ほか：2013）。

Holmström ら（2016）は、人工内耳装用率の増加により、ろうコミュニティ内で人口動態の変化が起こっていることを指摘している。人口動態の変化とは、人工内耳またはその他の補聴器を使用する聴覚障害児が聴覚障害特別学校には通わなくなり、通常学校やスウェーデン語の口話指導を中心に据えた聴覚障害者向け特別プログラムがある学校に入学するケースが一般的になってきていることを意味している。さらに、ろうまたは難聴学生の言語スキルの土台が 10 年前までは主に視覚志向であったが、口話・聴覚志向に変わったことも明らかにしており、こうした変容はスウェーデンのろう教育における「サイン・バイリンガリズム」の考え方への挑戦でもあるとしている。

②聴覚障害当事者であることへの肯定的ではない意識

スウェーデン聴覚障害者協会（2008）による「2008 年難聴当事者実態調査報告書」によれば、難聴者の 3 人に 2 人は職場において雇用主や同僚に自身が難聴を有していることを明かしていないことが報告されている。

なかでも、民間企業の労働者が難聴についてオープンにすることは特に難しいとされ、70%以上が職場で難聴について話さないと回答している。また、早期退職の聴覚障害女性教師 3 人のうちの 1 人は、難聴が早期退職に影響していると回答している。

こうした難聴・聴力損失は、病気休暇や早期退職の直接的原因として把握されることがなく、かわりにストレス、身体の痛みなど、難聴・聴力損失の結果として発生する二次的健康問題として浮かび上がっている。それゆえに、成人後において難聴・聴力損失等の当事者同士で集うことができる、「学び直し場」「生涯学習・生涯発達の保障」としてのヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学の意義や果たす役割は大きいのである。

③聴覚障害を有する亡命希望者の受け入れ支援

スウェーデンでは毎年、推定 20～40 人の聴覚障害者が亡命してきている。ヴェ

スタンヴィーク聴覚障害国民大学は重要な支援課題の一つとして、これら聴覚障害を有する亡命希望者の受け入れに関する EU プロジェクトを実行している。

このプロジェクトは、スウェーデン移民委員会、スウェーデン国立遺産財団、スウェーデン聴覚障害者協会およびレクサンドコミュニティと共同で、ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学が運営している。国民大学でこのプロジェクトを率いる Björn Albihn 氏は、亡命希望者がスウェーデン手話を学んで、とくに自分の亡命理由を提示できるようになることをめざしているという。

5. おわりに

本稿では、これまでに 3 回の訪問調査を実施したヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学の事例を通して、スウェーデンにおける障害者の学び直しと生涯学習・生涯発達保障のあり方について検討してきた。

日本における障害者の生涯学習支援を考えていく際に、スウェーデンの国民大学における多様なコースプログラムの開設と、障害者が自身の関心・ニーズに即して生涯にわたって学びを継続し、生涯発達を追求することができる当事者主体の生涯学習システムは、きわめて示唆に富んでいるといえる。

文献

伴亨夫・濱田豊彦・大鹿綾・稲葉啓太（2013）ヨーテボリ地域の聴覚障害児のための教育の進展と学校教育に関する研究—人工内耳装着児の増加と学校経営の観点からの考察—、『東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ』第 64 集、pp.143-150。

Holmström, I., Schönström, K. (2018) Shifts in attitudes towards ‘sign bilingualism’ due to a demographic change: The case of deaf education in Sweden. Sociolinguistics symposium 22, Crossing borders: South, North, East, West, Auckland, New Zealand, June 27-30, 2018.

文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課障害者学習支援推進室（2018）障害者の生涯を通じた多様な学習活動の充実について。

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/041/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2018/04/06/1403029_3.pdf

「ろうまたは難聴の亡命希望者のよりよい受け入れのための EU プロジェクト」。

<https://www.migrationsverket.se/Andra-aktorer/EU-fonder/Tidigare-fonder/Flyktingfonden/Genomforda-projekt/Mottagande-och-introduktion-av-nyanlanda-teckensprakiga-dova-och-horselskadade.html>

スウェーデン聴覚障害者協会（2008）「2008 年 難聴当事者実態調査報告書」。

<https://hrf.se/app/uploads/2016/06/rapport08.pdf>

高橋智・田部絢子・石川衣紀・内藤千尋（2018a）スウェーデンにおける障害者の生涯学習保障—北欧における子ども・若者の特別ケアの動向⑨—、『内外教育』第 6650 号、pp.8-11、時事通信社。

高橋智・田部絢子・石川衣紀・内藤千尋（2018b）デンマークにおける障害者の生涯学習—北欧における子ども・若者の特別ケアの動向⑬—、『内外教育』第 6661 号、pp.12-15、

時事通信社。

高橋智・田部絢子・石川衣紀（2018）アイスランド障害者の生涯・大学教育—北欧における子ども・若者の特別ケアの動向⑭—、『内外教育』第 6663 号、pp.10-13、時事通信社。

高橋智・田部絢子・石川衣紀・内藤千尋（2019）北欧における障害者の生涯学習と発達支援—スウェーデン・デンマーク・アイスランドへの訪問調査を通して—、『東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I』第 70 集、pp.217-234。

ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学ウェブサイト：<http://www.vastanviksfhs.se/>